

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』（1857年）
にみる英国パブリックスクールにおける
西洋古典教育の様相について

—トマス＝アーノルド校長の姿勢にも着目して—

土 屋 靖 明

Aspects of the Occidentale Classical Education on British Public School
Thomas Hughes; *Tom Brown's School Days* (1857):
Noticing the Educational Attitude of Head Master Dr. Arnold

Yasuaki TSUCHIYA

キーワード：西洋古典教育，英国パブリックスクール，トマス＝アーノルド，
レトリック（修辞），トム＝ブラウン

序

トマス＝ヒューズ（Thomas Hughes, 1822-1896）の文学作品である『トム＝ブラウンの学校生活』（*Tom Brown's School Days*, 1857）は、英国パブリックスクールのラグビー校の様相を描写したものである。パブリックスクールは中世末期に起源が遡られるとされ、主として貴族、地主、富裕な新興中産階級の子弟を収容した今日でいう中等教育機関に相当するものであり、ウィンチェスター校、ウェストミンスター校、イートン校、ハロー校、チャーターハウス校、ラグビー校、シュルズベリー校などが有名である。

ラグビー校の出身者としては、まずもって、後にフットボール競技の起源となる伝説的なプレー（1823年）を行ったとされるエリス少年（William Webb Ellis, 1806-1872）が挙げられる。エリス少年は1816年から1825年まで在学していて、オックスフォード大学卒業後は、聖職者となっている。数学者であり、『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865）の作者であるルイス＝キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）は、1845年から1850年まで在籍していた。第二次世界大戦開戦時の英国首相であるネヴィル＝チェンバレン（Arthur Neville Chamberlain, 1869-1940）もまた、ラグビー校で学んだ。

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について

ヒューズは、1834年から1841年の間にラグビー校に在学しており、卒業後はオックスフォード大学を経て、弁護士資格を取得している。ヒューズの在学時の校長が、まさしくトマス＝アーノルド(Thomas Arnold, 1795-1842)であった¹⁾。トマス＝アーノルドの実子であって、『エトナ山のエムペドクレス』(*Empedocles On Etna*, 1852)などで知られる、耽美派の抒情詩人で、文明批評家でもあるマシュー＝アーノルド(Matthew Arnold, 1822-1888)もまた、ラグビー校に修学している。

アーノルドのラグビー校校長在職期間は、1828年から1842年である。アーノルドは聖職者であって、古典学かつ古代ローマ史の研究者でもあり、1841年には、オックスフォード大学の歴史学教授となった。アーノルドは西洋古典を研究していたのであるが、専攻は史学であった。

『トム＝ブラウンの学校生活』では、ニシアス(Nikias, ?-413. BC), リヴィー(Titus Livius, 59?. BC-14. AD), ヴァージル(Publius Vergilius Maro, 70-19. BC), ユーリピディーズ(Euripides, 480?-406?. BC), ホーマー(Homer, 8C?. BC), ツキディデス(Thukydides, 460?-395?. BC), ペリクレス(Perikles, 495?-429. BC), タキツス(Cornelius Tacitus, 55?-120?), アリストファーンネス(Aristophanes, 446?-385?. BC)といった、西洋古典学関係の人名が散見される。パブリックスクールは、今日の日本でいう中学校と高等学校のような中等教育機関に該当するため、教材として取り上げられるのは、文学や史学といった具体性のある事柄が主であった。哲学の如く、抽象的で論理的、かつ概念的な内容は、中等教育においては、やはり難解であったのだろうか、取り上げられてはいない。従って、続編の『オックスフォードのトム＝ブラウン』(*Tom Brown at Oxford*, 1861)はともかくとして、『トム＝ブラウンの学校生活』においては、プラトン(Platon, 427-347. BC), アリストテレス(Aristotlès, 384-322. BC)の固有名詞も登場していないことから、プロティノス(Plotin, 205?-270)の如き新プラトン主義などは時期尚早過ぎることになるのではなからうか。

本稿では、『トム＝ブラウンの学校生活』の描写に基き、19世紀中葉以前の英国パブリックスクールにおいては、西洋古典教育がどのように行われていたのかという問いについて、考察して行きたい。同作品を読む限り、西洋古典学習に熱心な生徒はアーサーなど若干名で、その学習風景は、フットボールなどのスポーツ競技に対する没我的情熱を傾注している記述とは対照的な様相を示しているように思われる。西洋古典の暗誦などは、悪戯をした生徒に対するペナルティーとして課されていたのが実際であり、学習内容の定着などとは掛け離れた次元でもあったのだろう。著者のヒューズもまたそうした若者の一人であって、大学卒業後は弁護士の資格を取得していることから、そもそも研究者志望ではなく、20年も前の自身の就学時代を回顧して、エピメテウスの如く、述懐的に西洋古典を学ぶことの意義について、認識させられたと考えて然るべきではなからうか。

本研究を通じて、英国パブリックスクールといえども、中等教育段階では、プラトン、アリス

トテレス、或いはストア派のような哲学は難解である、ましてや、西洋古典学習においてプロティノスのような極めて抽象度の高い新プラトン主義関連の学説と向き合うことなど、難解過ぎるということを示して行くことになるであろう。中等教育段階では、史学や文学などが具体性でもって示される教材が適切であり、プラトン、アリストテレスなどは今日で言う大学の教養課程の哲学科目で講義されるのが適当であって、新プラトン主義ともなると、大学の専門課程以上において、研究されるべき内容と考えられて然るべきではないかということも考えて行きたい。

1. 西洋古典学習の教室風景 - 初歩文法が呑み込めない子どもたち -

「次の学期の始めにトムのはひつた低四学級は、低学級部では一番大きな組で、四十名以上もあつた。ここには、九歳から十五歳までのあらゆる年齢の年少紳士が見受けられた。この連中は、ラテン語やギリシア語の時間に、リヴィーのある一卷と、ヴァージルの牧歌と、ユーリピディーズのヘキュバを讀んでゐたが、それらの書物は、毎日少しづつの分量で、かれらに詰め込まれるのであつた。この不幸なる低四学級を引きずつて行くのは、不幸にしてその選にあつた教師にとつては、厄介な仕事であつたに違ひない。この級ほどまとまりの悪い級は學校中になかつたからである。この級には、初歩文法がどうしても呑み込めない、頭の悪い年嵩の連中が腰をすゑてゐて、交互に幼い連中の共笑的になつたり、恐怖的になつたりした。すなわち、幼い連中は毎日の學課の時間にはかれらの席を超越したり、嘲笑したりして、遊びの時間にはその返禮にかれらからひどい目に逢ふのであつた。この級には、燕尾服を着て、あごにうつすら鬚の生えかかつた氣の毒な連中が實に三人もゐて、校長も受け持ちの先生も、どうにかして高学級部に引張り上げようと苦心してゐたが、どれほど親切に尻押しをしてやつても、かれらの文法解明力と解釋力の方でいつかな承知しないのであつた。その次に來るのが、この級の大部分を占めてゐる十一、二歳の連中で、これは英国の少年中では一番悪戯好きで、向ふ見ずをしでかす年頃であつて、イーストとトム・ブラウンがその好適例である。猿のやうに策略に富み、アイルランド女のやうにいひ譯がうまく、先生を愚弄し、お互ひを愚弄し、授業を愚弄する始末で、ギリシャ神話に出て來る百眼の巨人アーガスといへども、かれらを監督するに困難を感じたことであろう。かれらを半時間と続けて神妙にさせることなど、全く不可能であつた。他にこの級に席をいてゐる連中といへば、九歳乃至十歳の神童連であつて、この連中は、他の生徒たちが手をつくし、品をつくして妨害を試みるにも拘らず、半年に一級の割合で進級して行くのであつた。かういふ早熟の幼少年が虐待を受けないやうに世話をしてやるだけで、結構一人の手が要つたことであらうが、先生は外にする仕事がいくらでもあるので、どうにもいたし方がなかつた。随つてかれらは、しよつちう腕づくで席を三つか四つ後方に押しやられ、宿題の韻文は盗まれ、書物はインキで汚され、チャケツは白墨でいたづらされ、華やかなるべき日々の生活がかへつて重荷となるのであつた。」²⁾

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』（1857年）にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について

「低四學級と、その下のあらゆる級は、大講堂でおさらへをすることになつてゐた。そして、かれらにはさつぱり信用がないので、講堂に入る前に課業の準備をすることは許されず、課業の始まる四十五分まへに、それぞれ受持の先生によつて、學校へ追立てられた。そして講堂で、あちこちベンチにかたまつて、辞書と文法書とを首つ引きに、がやがややかましいただ中で、ヴァージルとユーリピディーズの二十行を頭をしぼつて解釋するのであつた。低學級部の先生がたは、一緒になつて、この四十五分間、大講堂を歩きつ戻りつしたり、机について讀書をしたり、あるひは生徒の清書を調べたりなどして、出来る限りの秩序維持にあつた。しかし低四學級は、今では級としては多勢に過ぎる方で、とても一人の力で充分に世話はしきれず、随つて級の中核をなしてゐる腕白小僧どもにとつては、正に地上樂園、理想的な級といふことになつた。」³⁾

「先に述べた通り、トムはいい成績（good character）で三學級からこの級に進級して來たのであるが、低四學級の誘惑にはおきに抗しきれなくなつて、急激に學業も低下し、外の連中同様、手のつけられぬ悪戯小僧になり果てた。もつとも、最初の數週間は、どうにか眞面目さうな體裁をつくろひおほせて、新しい受持の先生の氣受けもよかつたが、この先生は、次のやうな一小事があつてから、かれを見直すに至つたのである。」⁴⁾

ギリシア語とラテン語の古典の授業風景の描写である。教材としては、リヴィウス、ヴェルギリウス、エウリピデスなどが用いられ、辞書と文法書とを首つ引きに学習されていた。学力に関しては、初歩文法が呑み込めない、文法解明力と解釈力が覚束ない子どもも少なからず見受けられた。

学力以上に、教師にとっての悩みの種は、子どもたちの授業態度であつた。トムとイーストを筆頭に、悪戯好きで、向こう見ずを仕出かし、策略に富み、言い訳が巧みで、先生を愚弄し、互いを愚弄し、授業を愚弄し、半時間と続けて神妙にさせることなど、全くもつて不可能であつたとのことである。宿題の韻文は盗まれ、書物は汚され、ジャケットには悪戯され、悪童連中は、腕づく力づくで後方の席に追いやる以外は、処置なしの状態であつた。やかましい彼らには全く信用がなく、一人の教師の力では如何ともし難い、まさしく無秩序状態であつた。裏の返せば、クラスの中核をなしている腕白坊主ども、悪戯鬼連中にとっては、やりたい放題、地上の樂園、理想的なユートピアとも言うべき世界であつたのだろうか。

「そこで兩人は、注意深く堀を踏査し、スタンプス老人から石炭割りのハンマーを借り受け、大きな釘を五六本買つて來て、一、二度試みた後で、あちこちの校舎によぢ登つて、莫大な數量のファイヴズ用ボールを手に入れたのである。この場所は大變かれらのお氣に召したので、暇な時間はすべてそこで過ごすやうになり、どの塔の頂きにも自分らの名前をがりがり書きつけたり、

彫りつけたりした。そしてたうとう、外に落書しない箇所が全くなくなつたので、大時計の分針にエイチ・イースト、ティー・ブラウンと書きつけて總仕舞にした。ところがそのとき、分針を握つてゐたため、器械を狂はせてしまつた。それで翌朝、先生がたや生徒がぞろぞろお祈りに出かけて来て、方庭にはひつたときに、損じた分針は定刻の三分前を指してゐた。それで全員が立ち止まつて時をつぶした。時計が定刻を報じると、扉が閉ぢられ、そして全校生徒の半分は授業に遅れた。トマスが調査を命ぜられて、分針に二人の名前を見出し、よつてそれが報告される。そして二人は召喚を受ける。二人が出かけて行くと、仲間の一群は、二人がどんな目に逢ふか、身振りで演じて面白がる。しかし校長は、二人の話聴いて、大して問題にもせず、ホーマーの詩句三十行の暗誦を課して、さういふ功名は、悪くすると怪我をして骨でも折るのが落ちだよといつて聞かせただけである。』⁵⁾

トムとイーストの悪童ぶりは極点に達し、大時計の分針に自分たちの名前を書き付ける始末であつた。しかも、器械を狂わせてしまい、翌朝の先生方や生徒たちのミサの時間に支障をきたし、しかも全校生徒の半分を授業に遅刻させてしまう事態となつた。悪戯の張本人である二人は、校長によってどんな大目玉を食らうか仲間の連中は面白がってはいたが、アーノルド校長は二人の〈匹夫の雄〉を諷めて、罰としてホメロスの詩句三十行の暗誦を課しただけで事なしとした。アーノルド校長の真意としては、学問を教授しても致し方なし、〈馬の耳に念仏〉と思ひ、内心では呆れ果てていたのではなからうか。

ここで注目すべきは、ホメロスなどの西洋古典の暗誦を、子どもたちが犯した不祥事のペナルティーとして課していたことである。先述にもあるように、子どもたちは、古典語の初歩文法が呑み込めない、文法解明力と解釈がままならないのであつた。文学作品のストーリーが頭に入らない、叙事詩の中身や内容が身に付かないことがままあつたことであろう。恐らく、叙情詩の情趣がわからない、もののはれを味わえない、わびさびに浸れない、風流に通じられないことも、常態であつたことであろう。従つて、西洋古典の学習を、問題児に対する懲罰として用いることも現実的となつてしまつたのではなからうか。

2. 西洋古典学習に秀でたアーサー少年に関する描写

—アーノルドの教育観とラッセルの見解—

作品の第二部では、悪童であるトムとアーサーとは対照的に、西洋古典学習に秀でたアーサーが登場する。

「第三の方法、すなはち藝術的方法は、アーサーのやり方であつた。かれは先づ、題目 (subject) になつてゐる人物 (character) なり事件なりの、どの点が最も手際よくヴァルガス (vulgus)

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について
の範囲内に収まるかを考え、いつも自分の考へを八行にまとめ上げようとしたが、それが出来なければ十行以内、否、十二行以内にすら限らうとはしなかつた。それからかれは、なるべく韻律辞典(Gradus)その他の助けを借りずに、自分の考えを適当なラテン語乃至ギリシア語に表現しようとかかり、自分の思ひついた最も適切な、最も詩味にあふれた言葉でそれを磨き上げるまでは満足しなかつた。』⁶⁾

アーサーの古典学習の手法は、こだわりの強い玄人肌を彷彿とさせるもので、取り組む姿勢に関して、並々ならぬ意欲ないし意識の高さを感じられる。古典学習の秀才と形容すべき逸材とも言えるであろう。人物なり事件が題目となるということは、教材はやはり史学ないし文学に関するもので、哲学についてのもではなかつたとは思われる。アーサーは自分の考えを八行以内に纏めようとしたが、それが出来なかつた場合は、十行以内、十二行以内に限らうとはしなかつたとのことである。そして、なるべく辞典などには頼らずに、ギリシア語ないしラテン語でもって、自分の考えを、頭に浮かんだ最適の言葉でもって表現し、最も詩的センスで溢れた述語でもって練磨させるまでは、決して満足することはしなかつたとのことである。アーサーは、レトリックに関しても、卓越した修辭的技法を身に付けようとして心掛けていたのである。また、ポエティカルにも洗練させて、情感を、情趣を、抒情を最良のスタイルでもって、叙述しようとしたのもあろう。アーサーは西洋古典に関して、プロフェッショナル魂に通ずる意識の持ち主であつたと言えるではなからうか。

ラッセル(Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970)は『教育論』(*On Education-Especially in Early Childhood*, 1926)の中で、自分の従兄でもあり、神学者であつてウエストミンスター寺院主任司祭であるところのスタンレー(Arthur Penrlyn Stanley, 1815-1881)司祭長、すなわち作品中のアーサーについて言及している。

「教育方法の変化は、原罪(original sin)に対する信仰の衰微から実に大きな影響を受けている。いまはほとんどすたれかけているが、伝統的な考え方は、次のようなものであつた。すなわち、私たちは、みんな〈神罰の子〉(Children of Wrath)として生まれ、邪悪(wickedness)にみちた性質を持っている。私たちのうちに何かよいものが生まれてくるためには、私たちは、〈恩寵の子〉(Children of Grace)にならなければならないが、この過程は、たびたびせっかん(castigation)されることによって大いに促進される、というものである。こういう説が私たちの父や祖父の教育にどれほど大きな影響を及ぼしたか、大半の現代人にはとても信じられない。彼らが間違っていることは、スタンレー司祭長(Dean Stanley)によるアーノルド博士(Dr. Arnold)の伝記からの二つの引用文からも窺えよう。スタンレー司祭長は、アーノルド博士のお気に入りの生徒(favourite pupil)で、『トム・ブラウンの学校生活』に登場する行儀のよいアー

サー少年 (the good boy Arthur) その人である。スタンレーは、筆者のいとこで、筆者は子供のころ、ウェストミンスター寺院を案内してもらったことがある。アーノルド博士は、わが国のパブリック・スクールの偉大な改革者であった。パブリック・スクールは、イギリスの栄光の一つとみなされ、いまだに大部分、博士の唱えた原理に基づいて運営されている。だから、アーノルド博士を論じることは、遠い過去に属する事柄を扱うのではなく、今日に至るまで、上流 (upper-class) のイギリス人の人格形成にあずかって力のある事柄を扱うことになるわけだ。』⁷⁾

ラッセルは行儀のよいアーサーは、アーノルド校長の御気に召す子どもであったと記している。その所以は、アーサーが単に品行方正というだけでなく、古代ローマ史研究者でもあるアーノルド校長から見ても、古典学習においても優れた才覚と姿勢とが示されていたからであろう。

イギリスは学校において、一定程度の体罰が法律上でも容認されている国家とも言われているが、それはキリスト教の原罪説とも関連するのではなかろうか。ラッセルの父祖の年代においては、そうした性悪を正機させるために折檻されることが茶飯事であったとのことである。しかしながら、アーノルドはそうした風潮を刷新し、100年を経過したラッセルの時代においても、英国の栄光の一つともされるパブリック・スクールの教育を差配し、紳士の人格形成にも大きく関与しているというのである。

ヒューズもまた、アーノルド校長の指導手腕に関しては、大英帝国広しと雖も、並ぶものなしと、下記の如く、最高級の讃辞を送っている。

「何といふ壮観だらう。校長 (Doctor) の統率ぶりは。目下のところ、徹底的に、賢明に、そして強力に支配されてゐる場所といへば、英帝國 (British Empire) の隅々を通じて恐らくここだけだらう。僕はここに來て校長の指導を受けるやうになつたことで、日一日と感謝の念を深くしてゐるよ。』⁸⁾

アーサーに関するヒューズの記述に戻ろう。作品中、ギリシア語が登場する唯一の記述は、次のようなものである。

「アーサーはクラスのトップで、解釋出来るにきまつている。時間が来るまで、安全に乗り切つて行くであらう。アーサーは解釋に先立ち、慣例に従つてギリシャ語の文章を読み上げにかかる。大して注意を拂わずにゐたトムは、アーサーが次の二行を読むときに、聲がふるへるのに氣づいてはつとす *-ἀλλά σὺ τὸν ἰπέεσσι παραϊφόμενος κατέρυκες, Σὴ τ' ἀγανοφροσύνη καὶ σοῖς ἀγανοῖς ἐπέεσσιν* (さういふ人々をあなたは言葉でなだめ、あなたのやさしい心とやさしい言葉で制し止めるのでした。)」⁹⁾

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について

上記のギリシア語は、『イリアス』(*Iliad*)第24巻第771-772行からの引用である。クラス随一の古典学習の秀才アーサーは、ギリシア古典に対する何気ない取り組みに関しても、その非凡さ、センスの良さ、資質の高さ、如才のなさ、才能の片鱗が顕わにされている段落ではなからうか。

「アーサーは依然として弱弱しく (*frail and delicate*), 肉體よりも精神の方が勝つてゐる (*more spirit than body*)。しかし、イーストやトムや、マーティンと親しくしてゐるお蔭で、水泳 (*swim*) をしたり、競走 (*run*) をしたり、クリケット (*cricket*) をすることを覚え、過度の讀書で身體を害なふことは全くなくなつた。」¹⁰⁾

アーサーは生来より身体が丈夫な質ではなかつたのだろうか、どうしても精神的な活動に偏りがちな子どもであつたのだろうか。外で遊ぶよりも室内に籠って讀書などに耽り、不健康で、運動不足の傾向にもあつたことであろう。しかしながら、トムやイーストラ級友との付き合いもあつて、*swim*, *run*, *cricket* をするようになり、心身の調和的発達が進められるようになったとのことである。水泳にせよ、陸上にせよ、クリケットにせよ、その競技能力の高低は度外視しても、心身の發育発達にとって重要な時期でもある思春期年代において、〈健全なる精神は健全なる肉體に宿る *mēns sanā in corpore sanō*〉の思想原理は、やはり、一つの教育目標とされて然るべきではないかと思われる次第である。

「しかし残る問題は、私がギリシャ語の不変語 (*particles*) を覚えた方が得をしたか、クリケットを完全に會得した方がよかつたかといふことです。私は鈍物ですから、とても両方に精を出すだけの時間がなかつたでせう。…君は強情 (*incorrigible*) だねえ。…しかし僕は例を引いて君を論破して見せるよ。そこのアーサーはギリシャ語とクリケットの両方をものにしてゐるぢやないか。… (中略) …しかしアーサーは例にはなりませんよ。アーサーのギリシャ語は生得の天分のいたすところですよ (*came natural to him*)。だつてかれはたしか入學當初に、ちょうど私がドン・キホーテ (*Don Quixote*, 1605) を讀むやうな調子で、楽しみにヘロドタス (*Herodotus*, 485?-420?. BC) を讀んでおましたからね。…」¹¹⁾

ギリシア語とクリケットの両立、すなわち勉学とスポーツの両立、いわゆる文武両道の困難さを示している文言でもあろう。やはり、文武両道などは、時間的にせよ、根気の為せる業であるにせよ、或いは才覚が要されるからにせよ、容易ならぬ、並大抵のことではないのであろう。アーサーにおいては、ギリシア語は生来の才によるところが大と言えよう。クリケットに関しては、トムらの影響があるとはいえ、後天的な、本人の努力の賜なのではなからうか。

3. アーノルド校長の実像とスポーツ教育について

—クーベルタンの見方にも注目しながら—

秀才のアーサーとは異なり、トム腕白坊主ぶりは、将来の希望を語る文章においても、如実に表現されている。

「僕はクリケット、フットボール、その他あらゆるゲームの第一人者(A 1)になりたいよ。そして紳士と俗人とを問はず、腕づくでは何人にもひけを取らぬやうになりたい (to make my hands keep my head against any fellow, lout or gentleman)。學校を去る前に六級に進んで校長(Doctor)を喜ばしたい。それから、外聞の悪くない(respectably)程度の成績で、オックスフォードに進學できるだけのラテン語とギリシャ語を修得したい。」¹²⁾

トムとアーサーの個性の相違、キャラクターの差異が明確化された文節でもあろう。「小説の主人公トム・ブラウンと同じ様に、ヒューズも學業の方は大してできのいい方ではなかつたらしい。學課の成績は、ラグビーでも、オックスフォードに入つてからでも、兄ジョージに及ばなかつたといはれる」と解説されるように¹³⁾、ヒューズは将来的には弁護士資格を取得することになるのではあるが、トムに学生時代の自らの姿を投影させたのであろうか、トムはあまり勉学に精を出す子どもではなく、學習に対する取り組みは、及第点を取ればよいとのものであった。そうした意味でも、『トム・ブラウンの學校生活』は、夏目漱石(1867-1916)の『坊ちゃん』(1906)にも類縁する作品と考えてもよいのではなかろうか。

アーサーことスタンレーは、後に『トーマス＝アーノルド博士の生涯と書簡集』(*The life and correspondence of Thomas Arnold, D.D.*, 1845)というアーノルド校長の伝記を纏め上げ¹⁴⁾、アーノルドの思想を広く世に伝えることに成功する。一方、ヒューズはアーノルドを取り巻いていた優秀な子どもたちの集まりの中に入ることは全くなく、常にアーノルドの近くにおいて直接薫陶を受けたアーサーとは異なり、ヒューズはアーノルドの内面を充分にすることができる立場には居なかつたとのことである。ヒューズはアーノルドとは比較的遠い距離感のある間柄であつたということになるのであろう¹⁵⁾。

トムがラグビー校に入った当日の、イーストとのやり取りに着目してみよう。

「イーストは一息いれると、こいつはどうしてなかなか話せるわいといつた顔つきでトムを眺めかういつた (looking with much increased respect at Tom), 〈君は足は遅くないな (you ain't a bad scud), 断然。ところで僕は焼芋のやうにポカポカして来たよ。〉 … 〈フーム, 是非その試

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について
場合に連れて行つてくれたまへ。そしてその話を聞かせてくれ給へよ。僕はフットボールが大好きでね。これまでしよつちゆうやつて来たのだよ。ブルックは僕にもさせてくれないかな。(駄目だよ、)とイーストはいささか腹立たしげにいつた、(だつて君はルールを知らないぢやないか。ルールを覚えるのに一ヶ月はかかるよ。それに試合で矢面に立つのは全く冗談事ぢやないからね(it' no joke playing-up in a match, I can tell you)。君らの私立學校でやるゲームとはわけが違ふのだ。何しろこの學期になつて、鎖骨を折つたのが二人、びつこになつたのが十何人もゐるんだからね。去年は一人、脚を折つたけ。)」¹⁶⁾

イーストとトムは初対面の時からすっかり意気投合し、ホメロスに登場するアキレウスほどではないにせよ、足は遅くはなさそうとのトムは、フットボールをやる気満々の姿勢を見せる。そうしたトムに対し、イーストはラグビー校のフットボールが如何に激しいものかを語り、早まって勇み足をしないよう諭す。中世以来、英国各地でフットボールは行われていて、最初に統一ルールが制定されたのは1863年であるが、それまでは地域や学校によって様相が異なるものであった。ラグビー校は今日のラグビーフットボール競技発祥の地とされているが、同じパブリックスクールであっても、随一の名門と言われ、19名の英国首相を輩出しているイートン校は、今日のサッカー競技に近いフットボールが行われていたとのことである。

近代国際オリンピックの祖であるクーベルタン (Pierre de Frédy, baron de Coubertin, 1863-1937) は古代ギリシアにも造詣の深い教育学者であったが、トマス＝アーノルドに関しても、次のような言及を行っている。

「クベルタンは得業士の学位をとるに当って、イギリスの精神主義者であり教育家であるラグビー公立学校校長トマス・アーノルド Thomas Arnold (1795-1842) をとり扱った。クベルタンには、現代イギリス教育に及ぼしたアーノルドの影響は、ある種のラジウム光線のように思われたからである。…彼は新しい教育、すなわちスポーツ的鍛錬によって人間に生きる力を与えようと願ったのである：とりも直さず主知主義の教育が危険を生むと思われたので“祖国に新しい力をもたらす”rebronzer la France ために、スポーツを採用すべきだと唱えたのである。彼はフランスで志を同じくする友人をもっていた。そして教育関係の高官といえども、この戦闘的な青年を軽視することができなかった。彼はアメリカに旅立つことになったが、それはトマス・アーノルドの教育思想がアメリカでどのように評価されているかを調べるためであった。政府は彼の旅に補助金を出した。」¹⁷⁾

トマス＝アーノルドを〈スポーツ教育の祖〉と考える所謂アーノルド神話の誕生は、ヒューズによるところが大であるともされてきたが、1950年代以降は否定されてきているとのことであ

る¹⁸⁾。そうしたアーノルド神話の生誕に寄与したのは、ヒューズではなくて、むしろクーベルタンではなかったのだろうか。ラッセルがヒューズを読んでいたことは既に言及済みではあるが、ラッセルのヒューズ論からも、アーノルドを〈スポーツ教育の祖〉とする思想は見出せない。クーベルタンの問題意識の根源には、主知主義教育に対する懐疑があったことであろうし、祖国フランスを再青銅化させるために、同志と共に、スポーツ鍛錬によって、élan vital ならぬ生の活力を躍起させようと意図したのでであろう。そして、文部科学関連の高級官僚にも打診し、アーノルドのアメリカでの評価を探究するために、政府に資金を出させたとのことであった。

クーベルタンはパリのソルボンヌ大学卒業後に、イギリスのジーザス・カレッジ (Jesus College) に留学し、アーノルドを知ったとのことである。英国ラグビーフットボール協会 (Rugby Football Union, RFU) の設立は1871年であるが、クーベルタンは審判の資格を取得して活動するくらいラグビー競技に傾倒していたとのことである。クーベルタンの人物像は、「小柄で細っそりとした身体、鋭く青く輝く目、濃い八字ひげをつけ生き生きとして才気のひらめく顔、…“筋力逞しい身体の中で火のように燃える魂”とは彼の座右の銘であったが、彼自身がそのとおりの人であった。彼は逞しい運動衝動を持つ人で、この衝動が同時に彼に精神的な課題を設定したのであった」というものである¹⁹⁾。些か先走りもあったのだろう、ラグビー競技の聖地とも言うべきラグビー校で校長を務めたアーノルドを、自らの問題意識に近接させて、〈スポーツ教育の聖者〉として解釈してしまったのではなかろうか。いずれにせよ、「青少年が没我的情熱を示すスポーツ活動を存分に教育内容として取入れた」とする教育者としてのアーノルド像は²⁰⁾、大いに疑義が持たれる次第である。

パブリックスクール校長であっても、1798年から1836年までシュールズバリー校の校長を務めたバトラー (Dr.Samuel Butler) は、フットボールを〈せいぜい肉屋の俸向き〉、〈若きジェントルマンよりも農夫の子どもや人夫に似合っている〉などと言って、露骨に嫌悪したとのことである²¹⁾。一方で、1853年から1887年までアッピングム校の校長を務めたスリング (Edward Thring, 1821-1887) は、フットボールに教育的価値を認め、積極的に奨励し、〈名門パブリック・スクールの校長で、これまでフットボールの試合に出場した校長がどこにいたろうかと私はいささか誇りを持って思わざるをえない〉と語ったとのことである。彼ら数名の校長は、学者であるだけでなく自らも参加し、子どもと一緒にプレーしたそうで、〈パブリック・スクール新世代の校長〉と呼ばれ、それ以前の校長たちとは区別されたりもする²²⁾。1884年から1905年までイートン校の校長を務めたウァーに至っては、フットボールの軍事的価値を強調し、参加を強制するに至った²³⁾。ウァー校長の意識の根底には、イギリス生まれのフランス人カトリック指導者であるモンタランベール (Charles de Montalembert, 1810-1870) の「ワーテルローの戦いはイートン校の運動場で勝ち取られた」(C'est ici qu'a été gagné la bataille de Waterloo) とのスローガンがあったのではなかろうか²⁴⁾。

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について

アーノルドはバトラーらとは明らかに一線を画してはいるが、スリング以降の教育者たちとも異質の教育を展開しており、目に余る悪戯を抑制し、子どもたちを自由時間を校内で過ごさせ、統制するための消極的手段としてスポーツを承認したのであったとの見方が、妥当なものであろう²⁵⁾。アーノルドは決して〈運動場の英雄〉を優遇したのではなく、重視したのは、知的道徳的卓越性であって、競技者の卓越した肉体ではなかったとのことである²⁶⁾。

「それを教へる規律 (disciple) と相互へに信頼 (reliance on one another) とは非常に貴重だと思ふ。…それは自己を滅し切つたゲーム (unselfish game) でなければならない。それは個人 (individual) を十一人 (eleven) の一團の中に融かし込んでしまふ。彼は自分が勝つために戦ふのではなくて、自分の組 (his side) が勝つために戦ふのだ。…ファイヴズ (fives) とか撒紙競走 (hare-and-hounds) とか、その他、一等になるか、個人が勝つのを目的にして、自分の組が勝つのを目的にしないゲームに比べて、フットボールやクリケットがずつとずつと優れたゲームである譯はそこにあるのです。」²⁷⁾

シュールズバリー校のバトラー校長などはフットボールを〈せいぜい肉屋の俸向きで、若きジェントルマンよりも農夫の子どもや人夫に似合っている〉と嫌悪したりもしたが、ヒューズはフットボールの如き組織的集团的競技をエゴを消却した unselfish game と形容し、競走や競泳のような個人的競技よりも優れたものと考えた。フットボールやクリケットのような団体競技においては、献身的姿勢、自己犠牲的精神、相互扶助的奉仕といった、或る意味においてキリスト教的倫理道徳の徳目が実現され得ると言えるのではなからうか。そうしたエゴを否定する思想は、キリスト教史のみならず、新プラトン主義の潮流においても受け継がれてきた道徳倫理と理解して然るべきでもあろう。

結語

本稿では、主として、トマス＝ヒューズの文学作品である『トム＝ブラウンの学校生活』で描写されている19世紀半ばの英国パブリックスクールのラグビー校における西洋古典教育の諸相について、鑑みてきた。中等教育段階ということもあって、学習内容は、ギリシア語・ラテン語の初歩文法、トゥキディデスやタキトゥスのような史学に関する教材、アリストファネスやヴェルギリウスのような文学作品であった。哲学関係は中等教育段階で教えられるのはやはり難解と思われ、ましてや新プラトン主義のようなより抽象的で複雑な思考を要される事柄は、高等教育段階といえども、教養課程よりもむしろ専門課程において、それも普通講義というよりも特殊講義のようなかたちで、教授されるべきものではなからうか、更には、研究演習となると、学部段階ではなくて、大学院段階で取り扱われるのが相当なのではないのだろうかと考えさせられた次

第である。

同作品を読み進めても、アーサーのように、レトリックや修辞技法などにこだわりを持つなどして、プロフェッショナル精神に通ずる意識を有して古典学習に取り組み、才を発揮できる子どもは少数であり、初歩文法を呑み込むことに難儀している子どもも少なからずであったとのことである。トムやイーストのように、全校生徒と教職員に大迷惑を掛けるような悪戯を仕出かしてしまい、ペナルティーとしてホメロスの詩句の暗誦を課されるのが、現実であったことであろう。古代史学の研究者でもあったトマス＝アーノルド校長も、内心では呆れ果て、学問を教授しても詮無きことと思うことが多々あったことではなかろうか。

トマス＝アーノルド校長の教育者像に関しては、〈スポーツ教育の祖〉として半ば神話化されてしまったアーノルドの姿については、今日のラグビーフットボール競技の生誕の地であったこと、またスポーツ教育に並々ならぬ情熱を抱いていたクーベルタンが自分の問題意識に近接させ過ぎて理解しようとしてしまったことが、そうした理解の原因ではなかったのだろうか。アーノルドの実像は、ラッセルの解釈が的を得ているように思われる。そうした観点からすると、アーサーは比較的アーノルドと近い距離にあったのに対し、作品中のトム、乃至は原作者であるヒューズは、アーノルドとは比較的遠い距離に居たと考えて間違いなからう。

註

原著作は、Thomas Hughes, *Tom Brown's School Days*, The Hokuseido Press, 1929. を使用し、邦訳は前川俊一訳『トム・ブラウンの学校生活』(上)(下)を参照させて頂いた。

- 1) 拙稿「トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)における英国パブリックスクール・ラグビー校の組織的競技(フットボール)にみる無私と公の精神性-トマス＝アーノルド校長の指導者像にも着目して-」,『教育思想』第39号,東北教育哲学教育史学会,2012年,61-73頁参照。拙稿「クーベルタン男爵の原点としての英国パブリックスクール・ラグビー校校長のトマス＝アーノルド博士の指導者像-トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)とパートランド＝ラッセル卿『教育論』(1926年)とに着目して-」,同第40号,2013年,27-36頁参照。
- 2) 前川訳(上),193-195頁。
- 3) 同上,195頁。
- 4) Hughes, *ibid*, p.113. 同上,195頁。
- 5) 同上,251-252頁。
- 6) Hughes, *ibid*, p.187. 前川訳(下),64-65頁。
- 7) Bertrand Russell, *On Education-Especially in early childhood-*, George Allen&Unwin LTD, London, 1926, pp.30-31. 安藤貞雄訳『ラッセル教育論』,岩波文庫,1990年,35-36頁。
- 8) Hughes, *ibid*, p.257. 前川訳(下),180頁。
- 9) *Ibid*, pp.210-211. 同上,92頁。
- 10) *Ibid*, p.229. 同上,114頁。
- 11) *Ibid*, p.255. 同上,177-178頁。
- 12) *Ibid*, p.239. 同上,125-126頁。
- 13) 『トム・ブラウンの学校生活』(上),前川解説,265頁。

トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』（1857年）にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について

- 14) Arthur Penrlyn Stanley, *The life and correspondence of Thomas Arnold, D.D.*, B.Fellowes, London, 1845.
- 15) 鈴木秀人「パブリック・スクールのスポーツ教育とトマス・アーノルド -〈スポーツ教育の祖〉ではなかったアーノルド-」, 『英日文化』, NO.53, 14頁, 1996年。M.Tozer, “Thomas Hughes: ‘Tom Brown’ versus ‘True Manliness’”, *Physical Education Review*, Vol.12, No.1, pp.44-48, 1989.
- 16) Hughes, *ibid.*, p.49. 前川訳（上）, 117-119頁。
- 17) Carl Diem, *Pierre de Coubertin: Olympische Erinnerungen*, Wilhelm Limpert-Verlag, Berlin, 1936. カール＝ディーム『ピエール＝ド＝クーベルタン - オリンピックの回想 -』大島鎌吉訳, ベースボールマガジン社, 1976年, 9-10頁。
- 18) 鈴木前掲稿, 6-8頁。P.C.Macintosh, *Physical Education in England since 1800*, G.Bell&Sons., 1952. *Landmarks in the history of physical education*, Routledge&Kegan Paul, 1957.
- 19) ディーム前掲書, 11頁。
- 20) 水野忠文・木下秀明・渡辺融・木村吉次『体育史概説 - 西洋・日本 -』, 体育の科学社, 1966年, 165頁。
- 21) 鈴木前掲稿, 16-17頁。鈴木秀人「『トム・ブラウンの学校生活（1857）』の再検討 - トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としての可能性 -」, 『東京学芸大学紀要 / 第5部門 / 芸術, 健康・スポーツ科学』第56集, 2004年, 47頁。
- 22) 「パブリック・スクールのスポーツ教育とトマス・アーノルド -〈スポーツ教育の祖〉ではなかったアーノルド-」, 16頁。「『トム・ブラウンの学校生活（1857）』の再検討 - トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としての可能性 -」, 47, 51頁。J.A.Mangan, *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School*, Cambridge University Press, 1981.
- 23) 「パブリック・スクールのスポーツ教育とトマス・アーノルド -〈スポーツ教育の祖〉ではなかったアーノルド-」, 16頁。
- 24) Charles de Montalebert, *De l'Avenir politique de l'Angleterre*, Didier, Paris, 1860, p.178.
- 25) 「パブリック・スクールのスポーツ教育とトマス・アーノルド -〈スポーツ教育の祖〉ではなかったアーノルド-」, 17頁。「『トム・ブラウンの学校生活（1857）』の再検討 - トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としての可能性 -」, 47頁。
- 26) 「パブリック・スクールのスポーツ教育とトマス・アーノルド -〈スポーツ教育の祖〉ではなかったアーノルド-」, 10頁。「『トム・ブラウンの学校生活（1857）』の再検討 - トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としての可能性 -」, 44頁。阿部生雄「スポーツ教育とチーム・スピリット - アーノルド -」岸野雄三編著『体育・スポーツ人物思想史』, 不昧堂出版, 1983年。
- 27) Hughes, *ibid.*, p.256. 前川訳（下）, 179頁。

【付記】

本論考は、2014年9月21日（日）に大阪府立大学 I-site なんばで開催された第21回新プラトン主義協会大会にて発表報告をした原稿に、加筆修正したものである。御意見御質問をして頂いた法政大学の山口誠一先生、司会進行を務めて頂いた金沢大学の三宅浩史先生には、この場を借りて、謝意を申し上げたい。